

戸谷高明

「古代文学の研究」

中 西 進

年来の畏友戸谷高明氏が「古代文学の研究」二巻を公刊された。その事自体非常に楽しい事であるのに、加えてこれを評せよという命を受けた。元來書評というものの性格も私にとって判然とせず重荷なのであるが、今回の気持は違ふ。これはいつもの談笑のように、戸谷氏に語りかける事が出来るからである。

先ずこの著書は美しい本だ。全巻十八篇の論文を取めた、その一々の中扉は左肩に寄せて題名を記し、右下に寄せて写真が入っている。記紀万葉・風土記の古写本をはじめとして鈴剣・鹿踊・虎の刻画・入馬腹舞の図といったもので、しかもそれぞれ篇中に言及するものである。その神経の行届いた造本は序文の土岐善麿氏の署名を毛筆のまま凸版にした気持と同じであろう。何年付合っても寡黙な戸谷氏が、内に抱いていととんでいた世界はかかるものであったかと、私はその凸版や写真版を繰る事に倦まなかつた。

私はこの一巻を頁の順には読まなかつた。篇末の発表日付を頼りに、執筆順に従つて読んだ。まだ研究途上の氏を見るのにこの

方法は無意味であつたかもしれぬが、一つには従来ほとんどの論文をその都度読んでいた私の追懐もあつたし、他の一つにはこの一巻が十年間の論文を取めたものである事に気がついたからでもあつた。しかしもっと正直に言えば、そうした読み方をする事によつて、より深く著者の内部に入りこめるのではないかと思つたからである。例えばこの論が氏の何才の時に書かれたものであるか、その論とあの論とがどう連つていつたのか、学者としての初期の十年に、テーマを求めて氏の心はどのように揺れ動いていつたのか、甲のテーマと乙のテーマは今では他所行きの顔をここに並べているが、その工房でのあり様は如何にあつたのか——。氏自身も言われるようにこの書は一つのテーマに基づいて系統化しようとしたものではない。かかる斯書に対してこの私のもくろみはある程度成功だつたように思つた。氏という研究者それ自体の解明にむしろ大きかつたのかもしれないが、翻つて各篇々の理解を、助けてくれるところも大なるものがあつた。

こうした気ままな読書の結果を若干報告するならば、十八篇は昭和三〇年に三篇が書かれ、以下三一・二年各一篇、三三年から三六年まで各二篇、三七年三篇、三八・九年各一篇が書かれている。その出發は童謡の研究で、爾來詠われる歌に氏の興味はある。それは歌垣・万葉集天武の吉野歌・乞食者詠とつづき、芸能に派生した侏儒の考察がある。この途中に入る常陸風土記の倭武天皇は歌垣の常陸との関連に生じ岐れたものであろう。この研究の終つた後三四年には古事記の論文二篇があり、翌年から第二の大きなテーマである万葉の景物論が三篇見られる。これを三六年

に一応措いた後は、右の整理、拡大と思われた。すなわち童謡一篇景物論二篇の追加であり、乞食者詠、古事記解釈に連る二篇があつて最近論文の万葉集と記紀歌謡との変質を説くものに到る。ここに戸谷氏の歩みがあるわけであるが、この歌謡と景物論という二大テーマを遮るもの、右にあげた三四年の二篇、殊にその「別ぎとられた玉釧——古事記の表現——」は年代記的に異質であるのみならず内容もまた異質なのである。その具体的な内実は後に触れる事としても、その異質さを、右の分析が一層明確にしてくれるのであり、同様最近論文もこれが未来に連つてゆく端緒である事を教えてくれた。

右の操作に生じた結論を換言する事によつて、そろそろ内部に入つていこう。私がかねがね一書として取纏められたものの内部の統一という事が気になっている。一般に、大著書は、その志向においてもその方法においても、極めてよく統一を保っているものである。それに反して処女作というものは往々にして種々な角度を示しがちなものである。正しくはかかるゆえに大著書といひ、処女作というのかもしれないが、ともあれ私は前者の大人げない表情に空しさを覚えながらもその美しさに讃嘆し、後者の整わぬ未熟さに焦立ちを覚えながらもその力をいとむ気になつてしまふ。そうした私に斯書はある不思議さをもつて映じた。先に述べたような歌謡の解明において、その主体的志向は極めて明確であり、景物論においてその方法はまことに破綻がない。その点において斯書は既に大著書の風貌を呈しているのであるが、さりとてこの目次に並んだ篇目はやはり全円的ではない。その志向という

点を見ても「古事記の表現」「性格について」「変質の一面をさぐる」「基礎的考察」「背景と成立」「周辺——動物表現と記録」「発生と変遷」といったテーマのずれがある。研究者が何を求めるか、これは生命より大事な事である。主体性のない研究はあり得ない。戸谷氏という研究者主体の賭けた夢は何であつたか、残念ながら私の非力にはそれを純一に抽出する事が不可能であつた。斯書は処女作でもあつた。いや正にこれは氏の処女作なのだからそれが一半の風貌として大著書の礎を宿していると言つた方が正しいのかもしれない。

そしてこのあり様は題目の選定を先のように整理した上にも生ずるのである。昭和三四年の玉釧の論と「ムスビ二神に関する考察」——恐らくは氏自身も期せずして、この二篇は巻頭の二篇でもあるのだが——は何故に先を閉じ後を絶つてここに書かれ、かつ異質であるのか。その原因の穿鑿は不必要だし、興味のない事だが、この異質な玉釧をここにもつ事によつて斯書は大人げない空しい表情が破られ、整わぬ力が生じているのである。最近論文「万葉集と記紀歌謡——変質の一面をさぐる——」も同様に——これ又氏の第二グループの巻頭に据えられたものであるが——記紀万葉を史的に把握しようとする点において先立つ何の傾向も承けぬものである。この破綻が同時に今後展開する氏の行手を志向する強さをも示している。この論を支える方法は玉釧のそれと違つて斯書の大勢を占めるものと同じである。だからこれが未来に向うという判断はテーマにおける年代記的判断によるものなのである。

さてしからは、斯書を含みもつ統一性と不統一性とはどのような内部の問題であるのか。私は先に志向について触れたが、氏の志されたものは、ほぼ解釈であったと思われる。童謡三篇にしてもその性格や文献定着、文献記載の意味の解釈であり、口誦歌の研究にしても性格・伝誦過程・成立の解釈であったと思われる。記紀風土記の神格やヤマトタケルの性格を探るのもその一斑であろう。しかし一方万葉景物論においては解釈というよりは「基礎的調査」であり、種々な角度から実体を紹介してくれたものである。その態度は「侏儒とその周辺」にも「虎とふ神」の周辺」にも一貫している。これらにおける統一が著者の中でどのようになされているのか。更にこれらは解釈・紹介をテーマとしたものかという事が出来るが、「古代歌謡の一考察——『ぬばたまの夜は出でなむ』——」は大半を語の解釈に執しながら、実は解釈がこの論の主題ではない。もし仮りに解釈がテーマであるのなら、「日が入ったなら八ぬばたまの夜になってほしい」という解釈は誰も信じないに違いない。日が入ったなら夜が来る事は当然だからである。そうではなくて氏は「△真黒な夜」になってほしいと、説くのである。そこで「夜は暗いものであるが、それにもかかわらず△暗い夜を歌わずにはいられなかった、かれら古代人の心情」(六四頁)を氏は言うのである。この一篇を、私は語の解釈をモチーフとしてテーマは古代人の心情の追求にあると解する。その故にこの一篇ははっとさせるような清新さを持っているのである。「剥ぎとられた玉釧」もそうである。玉釧を剥ぎとった話はモチーフであり、氏のテーマは記の人間性の勝利を説く

点にある。その故にこの論に対して執筆当時言及した讃辞を、数年たった今も改めようとは思わないのである。こうしたモチーフとテーマが明瞭に読み取れるものと前者との統一は、著者の中でどのようになされているのか。また「童謡」の性格について「は終始一貫して真摯に童謡の性格を追求しようとしたものである。一言、それは予言性にあるという事を求めるのである。ここに看取される構成は揺るぎない確かさをもっている。『ムスビ二神に関する考察』も『万葉集二五番』『天皇御製歌』も、先説の批判から始められ、前者は両ムスビ神の氏族別を、後者は民謡の御製化を、整然と説くのである。これに対して「虎とふ神」の周辺——古代の動物表現と記録——は魏志の吟味から始められた故か、テーマが集中しないうらみがある。「虎とふ」神に「興味ぶかい問題がひそんでいるといえよう」という以外に何がテーマであるのか、私には読み取る事が出来なかった。馬・牛・熊・狼と渉るそれをどのような四肢として「虎とふ神」の骨格が組立てられるのか、この論のコンポジションは散漫ではないか。この「周辺」という言葉を等しくする「侏儒とその周辺」も、遂に古代のその実体は何ら明らかに知る事が出来なかった。この事を逆に言えば、非常に論が丹念である、事細かに資料が蒐集され、言及がなされている、という事でもある。しかしそのテーマへの必然性を失えば、論の徒らな拡散となる恐れがある。これらと先にあげた諸論、快い直線性をもった諸論との統一は著者の中でどのようになされているのか。

私は今主題とか着想とか、構成とか方法とかという表現を用い

て論じて来た。もしこれが形体上の事であるならば、私はつまらぬこだわり方をした事になる。しかしこれらはいもう一つ学問上の主張に拘わるものである事も少しづつ触れて来た通りである。研究論文である以上、説得性と一体であるところに問題があろう。全篇に亘る事として言えば、この一卷を出発とする爾後の研究において何を求めていくか、研究者の主体に密着した問題であると先に言ったそれを、ここに纏められた珠玉の如き未来性から撰択するところに課題があるのではないか。如何なるモチーフによって何を主題としてゆくのか、それぞれのきわやかな認定、区別とその追求が迫られているのではないか。その主題の上に、整えられた構想が据えられ、一凶に荒々しく核心に迫る力の一書全篇を蔽う事が、次の問題ではないか。例えば本書が先説から択一して主張に入る段階に私は屢々不十分さを感じた(六七・三八頁三・二〇)。これはもっと徹底的であってほしい。例えば「侏儒とその周辺」に援用された夥しい資料は、そうする事によってもっと活き活きとしたお喋りをしはじめるに違いない。万葉景物論五篇は「基礎的考察」と言うからには次にこれを基礎とした研究があるはずである。この景物がどのように「戸谷氏の研究」として古代文学を解明するのか、それを生むものが右であるに相違ない。巾広いという事は随想になりかねない。

これらもろもの意味において注目されるのは、外ならぬ玉釧の一篇である。氏は記紀を比較して書紀は合理的な方法で記は人道的な面で責める立場をとり、その故に記で大槓は許される事がなかったのだと説く。記の鮮烈さを「膚も爛けきに剃ぎ持ち来

て」の一語に求める。よって人間的なものを記の中に擬視しようとするこの論は、遠く高木市之助博士が古事記に倭建命の浪漫的精神を認められた論と相呼応して学界に聳える業績であるといえよう。私はこの論を絶賛してやまない。この論を限りなく高く評価すればする程、景物論は、つまらぬのである。ここには戸谷氏がおおり、正確な狙いと聡明な構想と旺盛な批評とがあるからであり、後者にはこれは一つもないからである。

以上斯書の総体的な批評を一言したためたが、次に各論への私見の書き込みをここに写す。

「ムスビ二神に関する考察」、両神の現われ方を吟味する基礎に立ち二神は相重なることなく、タカミムスビは高天原系神話にカミムスビは傍流的な出雲系神話にしか現われないと結論、タカミムスビがすべて「神」といわれるのに対比してカミムスビは冒頭のみに「神」といい、以下出雲の部分で「命」とするのによって出雲系氏族の神とする太田亮氏の説を支持する。優れた発展のさせ方であろう。

「剃ぎとられた玉釧——古事記の表現について——」は既に多く述べた。ただこの記紀の相違を両書の政治性の濃淡にのみ求められたのはもの足りない。こんな概念的な求め方ではなく、もっと立入ったものを求めてほしいと思う。

「古代歌謡の一考察——『ぬはたまの夜は出でなむ』——」、第二節の最初、五三・四頁は余りにも判り切り過ぎていて不要である。五六頁、「お出でなさい」が八千矛神を主格とするために

は無理だといわれるのは何故か不明であった。総じてこの部分の前説批判は十分とはし難く思つた。五八頁「夜隠り」は愚見を採用してくれたかと思つたが、氏の解釈の唯一の根拠になるものだけに、夜の实体を証するものももっとほしかった。「夜去り」は「しある」の約という説もある事だから。全体として「夜になつてほしい」と解する場合の「出づ」の検討はどうか。またこの論の中心は「ぬばたまの夜」にある。ここに山があるべきなのに、つけ加へたに説かれた感がある。

「童謡」の性格について、「わざ」は神の行為を示す言葉という説に従うが、こぼれ該も伊い優よも一つの説に過ぎない。襦わだかまのみが何かデモーニッシュな印象に連るので、公正とは云い難い。七〇頁常陸風土記の神のをとこ・神のをみなによつて童男女の神への奉仕と説くが、神郡の男女という意味は断じてないのか。七八頁に掲げた西村真次博士の定義、わざうたは諷刺歌で、諷刺歌の特色は予言的性質を有つことだといふのに対して、氏は童謡を予言歌といわれる。この論の結論でもあるのだが、どう違ふのか、明解でなかつた。

この童謡の特色を予言性に規定する結論は次の「続日本紀以後の童謡」にも持ちこされるが、そこでは「記録の童謡を実際に或る事柄を予言したものとして信ずることは困難であるが、将来に対する願望や意志や予想をうちに含んだ歌謡の存在を否定することとは出来ないであろう」(八六頁)といひ、西村博士の説は「予察、願望、推想を伴ふのが常である」というものである。九三頁、三代実録の童謡が農民生活に根ざした民謡風なものというが、こ

の根拠は示されない。だから九八頁、当事者がこれを予言歌に仕立てたという次の段階も不安であり、九九頁結論の部分で「予言歌としての童謡の性格に準拠してその機能を政治の上に活用し得たのが続日本紀以後の童謡である」といわれるともう一度混乱してしまふ。またここでいう「政治的意義」なるものも、個々の事例は示されるけれども抽象していえばどんなものか。

『わざうた』覚え書——中国史書の童謡を中心に——、童謡論の第三論として第一論より七年後にかかれたものである。手練といったものすら感じさせる好論と覺えた。

「万葉歌と記紀歌謡——変質の一面をさぐる——」、歌謡が具體的であり、万葉が抽象的観念的という結論は至当なものである。これを「移行は直線的でない」といわれるわけだが、右は直線的ともいえる至当さだろう。むしろ右の如くでない曲線的な姿とその因縁とを説き明かしてほしい。

「雲」についての考察——一三六頁、記紀巻頭歌の本来の意味は、「あれはあの雲の妻をこもらせるために幾重にも垣をつくっているのだ」といふ。斬新な解釈である。しかしこれを支えるものとして自然と人間とを結び靈魂觀を示されるが、これからはむしろこの共感的な歌詠は生まれまい。右の如き解釈によればこの歌は、むしろ自然と人間とが未融合に結合した段階ではなく、自然と人間とが相対応して結び合った段階である。氏は一四四頁で「雲と人間との交感的關係」をいわれるが、正しくその如き關係であり、古代呪術の中の關係ではない。その区別が全篇に薄いかと思われ、だから同じ物と考へておられるものに「雲と人間との

融合的関係」(一四〇頁)という言葉が現われる。「雲における擬人的表現は、修辭としての擬人法によらない表現であった」(一四四頁)ともいう。やはり「擬人的表現」とは修辭上のそれを言つて然るべきだろう。これを用語上の瑣末と心得ても、右の「融合的關係」と「擬人的」雲とはまるで異質である。これを同質として万葉の雲の背後に古代信仰があったというのは肯じ難い。その変化こそ「直線的でない」のであり、これが問題点であろう。

一四九頁、「特色ある巻」とは何をいうのか表の数値と結びつかなかった。一五一頁、天雲が概念的な語だから「民謡的な世界で更には観念的な歌などに」継承されたという為には民謡が唯一観念的でないならばならぬ。一五二頁、白雲を結論して「必ずしも一樣でないが、叙景歌の表現であったといつてもよいであろう」という。読み進んでここに到ると、少々安易ではないか。一六四頁「雲隠る」を説いて恰も月や山・鳥が忽然と雲に隠れるようにこの世から姿を消す経験による表現と説く。面白い。同頁と次頁に亘つて万葉の作者未詳歌を叙景歌と言えず、記紀の「はしけやし……」を叙景歌と説く。叙景歌の歴史をどう説く上でだろうか。すべて個々の歌を評し去るのみでは論はなり立たない。素朴な経験主義者たちがそれを自然主義と混同したが如きである。結び、変遷があったという。それは秩序立て得ぬものだろうか。

『月と月夜』についての考察、一六九頁、万葉の月夜の多い事は月光の夜を愛好したからだけではなく実用性もあると考えられる。またここにもある数量的調査は何を主張する為に必要なのか、基礎的考察だから必要な調査なのか。この中の民謡との結び

つきもパーセントは全万葉歌中の民謡のそれとの比較を土台にせねば何とも言えまい。一八五頁にある暁月、夕月は出典をあげてほしい。

『霞』についての考察、景物論全篇と一樣であるが、常に後代を顧るのは周到と思われる。もつと纏まればよい比較となるが少々記憶に頼る面がありはしまいか。二〇八頁、固有名二十例というのは例を足すと十八例しかないが、いかに。ここでも集約された結論がほしい。

『霧』についての考察、霧は部分的叙景の対象として用いられるのが限度であったという(二四〇頁)。これは面白い。何故他と異なるのか、その類似と相違とが本題である。

『柳』についての考察、柳に呪的信仰があるという説に従つておられ(二四七頁)、その根拠を旺盛な生命力に求めておられる。世上説くところであるが、もう一度確認した上で去就を定めたいと思う。感染呪術とするのもヤマトタケルの国徳歌と家持歌二首とでは異論も多からう。二五四頁、「詠物の歌で柳が風景を構成している場合、そこに純粋な叙景歌を発見する」といわれる。詠物歌であれば叙景歌ではない。にも拘らずそうだとすればその関係は如何にあるのか。

『万葉集二五番「天皇御製歌」、僻案抄・美夫君志の説に反して東宮時代の作なら皇太子の御歌とあるべきものを天皇御製歌として天武代に出してあるのは即位後の作だとする(二六一頁)』。

同じ巻一には藤原宮標下に持統・文武を太上天皇・大行天皇と称し、天皇が元明である場合もある。反論とならない。二六三頁、

此の歌を天皇に結ぶ事によって「權威を持たせようとした」という説に賛している。これも難しい問題で確認がほしい。權威という気持は、例えば愛誦する気持などとはうらはらな気持であろうから、随分場が限定されるだろう。二六七頁「念」を「思」と區別した説に反対する。全く同感である。同じく民謡から個性歌への逆を推定したのも、より自然で賛成である。しかし二六八頁、吉野入山という重大で苦悶に満ちた体験の表現に「かくも民謡に依存する創作態度は不可解である」という。ここで民謡と個性詩との対立が問題になる。この両者はかかる対応をするものなのか。ではないからこそ「実は民謡が御製歌らしく改作或は附会されたもの」(二七一頁)と氏は結論されるのであろう。

『乞食者歌二首』の背景と成立、二七八頁以下諸説を博搜し精緻である。二八三頁、食用としての面と相違点としてあげた特性とが各々の骨子となっている事が成立上に大事な点とされる。聴くべき言である。二首の時代を求めて天武持統朝という(二九一頁)。皇室への時代精神によるのだが、これ以後ならよくはないか。白鳳期の強烈さは二首にさ程はない。殊に謡い物であり「全くといっていいほど新鮮な」構成要素である(二九六頁)のだから。この新しさは同感である。最後、万葉への経路はもう少し具体的な内容が知りたい。

『虎とふ神』の周辺——古代の動物表現と記録——、広い範囲の文献への顧慮は貴重である。三一頁、聴者の反応をいかに想定するか、それがききたい。

『常陸風土記の倭武天皇』——倭建命との関連において——、

その開発的な像は民意に負うという結論は首肯すべきであろう。細かい事だが、三二〇頁、藤間氏の説をあげて、この「考えは以前からあった。藤間氏の説が別に新しいわけではない」と括弧に記されるまま、その説は書かれない。藤間氏に失礼ではないかと妙に気になった。同頁、英雄として把えることが「諸般の事情から」困難というばかりで、諸般は記されない。また次頁には諸氏の説をあげながら「模糊として存在するばかりである」という。然らば何故にあげるのか、この過不足が私には気になる。

「歌垣の姿——發生と変遷をめぐって——」、従来の成立説の検討と題する節の中で、「最も有力なものとして」豊穡希求の農耕儀礼に基づく説をあげ、かつこれに従うのであってみれば、誰の何時の説かはいうべきであろう。そして次頁、他の一面の原初性格として「信仰からはみ出た個人的欲求」を認める。この同じ原初段階での二者は矛盾しないものだろうか。更に次頁第三の条件として「自然環境に対する憧憬的要素」を重視する。これが自然の風物をめぐる意であるなら常陸風土記の記事と雖も、今日的なそれとは理解し難いのだが。三五二頁、熾選びの要素は宗教的呪術の時代より新しいと考えられるようである。これこそ古風なものではないのだろうか。なればこそ天平の虫麿は空想的にそれを詠ったのだと私には思えるのである。総じて右の諸点は宗教とはいかないものか、神的なるものと人的なるものとの認定把握の問題に帰しようが、それを前提に論じた上でなければ論者の意図は歌垣の周辺をめぐるとのみに終りはしないか。三五二頁にいう Dialogue の文学という観点はまだ詳論がないようにも思

うが、この論の範囲外の命題であったのか。三五六頁補記の中で大場磐雄博士の説を紹介するが、これは「評註常陸国風土記新講」の井上雄一郎氏の説と同じである。大場博士の説は昭和三十一年九月以前であろうか、はずかしい事にこの前後を私は知らない。戸谷氏が「注目される見解である」というので、私の不明であればよいと思う。

「侏儒とその周辺」、古代のそれを求めて「侏儒舞の種子を求めるときはできないといえよう」（三六八頁）、「そうかといつて侏儒のもつ伎芸の内容が舶来のものであって日本古来の伝統的要素がなかったとはいえない」（三六九頁）という。要するに不明であるのは吾人の屢々経験するところで何ら異論はないが、「なかったとはいえない」根拠はない。これは蓋然性の有無とも別問題で学問を曖昧にしかしないのではないかとかねがね思ってきた。一般論のだが戸谷氏はどうお考えだろう。三七二頁、スクナヒコナが侏儒の尊崇する神ではないかと考える「可能性はあるものとみてよいであろう」という。どこにあるのか、要はスクナヒコナの動作が伎芸的だと考え、スクナヒコナの常世へ至ったという記事があり、中国史書およびその示唆を受けた続日本後記に海外の侏儒国が見える事を結びつけるのであるが、神対芸人という尊崇関係はどこにもない。それともスクナヒコナは遂に神以外ではないのだろうか。

以上各篇の結論をおおむね妥当と思いつつ、わが錯覚の幾つかを申述べて来た。一個人の錯覚は斯書の学界への寄与に何らの影

響もあるまい。そしてここまで書いて来て、私は随分非常識な書評だという事にようやく気づく。編集部は、まさかこんな長広舌を予測されよう筈はない。編集部のみならず戸谷氏自身も自由に書けといわれたが、まさかこんな気ままなものを書くとは思われなかったからであろう。実際書評というものはつらい。こんなに骨身を削るように書いて来て、戸谷氏に不快な思いを抱かせるかもしれないのである。編集部はこの冗漫な紙幅を持って余すに違いないのである。ほろ苦い思いだけが今の私に残る。しかし戸谷氏は雑誌論文の都度具申した愚見を取入れて斯書に改めて下さっている。この上は寛容にすぎるの外はないようである。

(40・8・15)

(昭和四〇年三月二〇日、桜楓社刊、A5判三七七頁、二四〇〇円)